



夢追人VI

かとう学園 宗像市立河東中学校
学校通信第41号(R5. 1. 6)

冬ながら 空より花の散りくるは 雲のあなたは 春にやあるらむ

河東中生徒のみなさん、保護者の皆様、地域の皆様、新年あけましておめでとうございます。

年頭、『古今和歌集』の歌を送ります。この歌は、平安時代の歌人、清原深養父の和歌です。清原深養父は、『枕草子』で有名な清少納言の曾祖父にあたる人です。現代語に訳すとこうなります。

「冬なのに空から花(雪)が降ってくるのは、雲の向こう側は春なのだろうか。」

ちらちらと雪の降ってくるのを、花びらの散るのにたとえています。今はまだ寒い冬だけど、雲の向こうに感じられるように、もうすぐ春がやってくる予感を歌ったものです。そう、もうすぐ春なのです。

目の前のことに集中し、全力を出し切る、今年一年に ～ 3学期始業式 校長式辞より ～

あけましておめでとうございます。今日から3学期が始まります。河東中のみなさんは、今日、13日ぶりに学校へ向かう途中で、様々な思いや目標を秘めて登校してきたと思います。今年こそ、勉強で成果を出そう、部活動やクラブチームで結果を出そう。受験に成功し、行きたい高校へ入学できるよう最後のひと踏ん張りだ、など。様々な思いが年の初めの今あると思います。今日の校長先生の話は、そうした年の初めの目標や意気込みが成功するためのヒントになるという話を2つしたいと思います。もちろん2つの話は関連があるので、話の途中で2つの話のつながりに気づいてくれるとうれしいです。

1つ目の話は、『三匹のカエル』という話です。この話の原型はイソップ童話にあるので、似た話を聞いたことがある人もいられるかもしれません。この類の寓話は、話の筋そのものよりもその話に秘められた話の真意に意味があるので、そこを探りながら、聴いてください。

あるところに、3匹のカエルがいました。3匹のカエルは、牛乳がいっぱい蓄えられた容器を見つけます。この牛乳をたらふく飲んでやろうと、1匹ずつ容器に飛び込んでいきます。

まず、1匹目のカエルが牛乳の容器に飛び込みます。1匹目のカエルは悲観主義者でした。牛乳を飲んだまではよかったのですが、たらふく飲みすぎて体が重くなり、だんだん牛乳の中に沈み込んでしまいます。そして、自分にはどうすることもできない、もうダメだ・・・とあきらめてしまい、とうとうそのまま溺れてしまいました。

次に、2匹目のカエルが牛乳に飛び込みました。2匹目のカエルは楽観主義者でした。牛乳をお腹一杯飲みこんで、お腹を上についていました。そしてだんだん沈んでいきます。2匹目のカエルはこう考えます。きっと誰かが助けにきてくれるだろう。自分だけは助かるはずだ。あわてず、助かるのをまとう。そのうち何とかなるさ・・・とのんびり構え、結局溺れてしまいました。

最後に、3匹目のカエルが牛乳の容器に飛び込みます。3匹目のカエルは現実主義者でした。牛乳をお腹一杯飲んだ後、体が沈み込む異変に気づきます。そして、周りの状況をよく見て考えます。自分にできるのはもがくことだけだ、と必死に手足をばたつかせます。すると、泳いていると、だんだんと牛乳が少しずつ固まりだします。牛乳が次第にバター状になったので、バターの上に乗って容器から飛び出ることができました。



3匹のカエルのうち、助かったのは、行動を起こした3匹目のカエルだけです。なにもしなかった2匹は溺れてしまった、というストーリーでした。ピンチに陥った時の人間の心理によく似ています。あきらめるのか、誰かの助けを待つのか、もがくのか。3匹目のカエルは、もがいて、もがいて、もがき続けることで、または自分の置かれている状況を冷静に分析し、今の自分ができていることを考え行動にうつします。

この3匹のカエルの物語から読み取れることがいくつかあります。それは、新年を迎え、新たな気持ちで勉強や部活動・クラブチームで頑張り、受験や就職に取り組むみなさんの多くが経験するであろうことにつなげて考えることができます。カエルたちのように、何かに挑戦すれば、必ずうまくいかない時や困難に出くわします。この寓話では、うまくいかないことや困難を、溺れるというたとえで表現しています。この話のポイントは、こうした場面で、もうダメだとあきらめる悲観主義にならず、誰かが助けてくれるとか自分だけはなんとかなるだろうと楽観主義にもならず、今の現実をしっかり見つめ、今の自分にできることに全力を集中する現実主義をすすめています。

では、次に2つ目の話に移ります。まず、この写真を見てください。みなさんは、この銅像を見たことがありますか？ かつては、全国のほとんどの小学校に設置されていました。二宮金次郎または二宮尊徳の銅像もしくは石造です。校長先生の通った50年前の小学校にも正門横にあったのを記憶しています。おそらく、みなさんの河東小にも河東西小にもすでに撤去されてなかったと思います。戦前は、全国の小中学生が彼を知り尊敬していたのに、今彼のことを知っている小中学生は少ないと思います。内村鑑三が英語で書いた『代表的日本人』という本を出版したこともあって、むしろ外国では有名な日本人です。しかし、わずかに残った銅像も、近年、歩きスマホにつながりかねないというくだらない理由で撤去され続け、彼を知る日本人は減り続けています。



さて、かいつまんで二宮金次郎の業績を紹介します。金次郎の最大の業績は、江戸時代末期、日本中の農村が荒廃し、飢饉で餓死者が相次ぐ中、近代農業を人々に教え、生涯で600余りもの農村を復興させ、たくさんの命を救ったことです。金次郎の子どもの頃の話をし少しします。江戸時代の終わりに今の神奈川県に生まれ、幼いころ、大水害で家の田畑の大部分を失います。その苦労がたたってお父さんを14歳でなくし、16歳で母もなくします。おじさんに預けられた金次郎は、何とか自力で身を立てようと勉強に励みます。

昼間はおじの家業の農作業に励み、夜は寝る時間を削って勉強に励みました。しかし、おじは、農民に学問はいらないと考え、金次郎が油の明かりで本を読むことを浪費だとしてきびしくしました。金次郎が非凡なのは、荒れ地で菜の花を育てて、菜種をしぼった油に灯をともして夜の読書を続けたことです。菜種油というのは、この近くでは釣川の土手で3月に黄色の花を咲かせる菜の花からとった油です。昼間も、山に登って薪を切り、薪を背負って歩きながら本を読みました。銅像や石像は、このことの逸話がモデルとなっています。

ではなぜ、戦後この70年あまりで全国の二宮金次郎の銅像が消えたのでしょうか。また、戦前は修身の教科書に必ず出ていた金次郎が、道徳の教科書はおろか歴史の教科書から消えたのはなぜでしょうか。今日はあえてそこにはふれません。

さて、今日は、年頭にあたり全校生徒のみなさんに2つの話をしました。河東中のみなさんなら2つの話の接点はもうおわかりのことと思います。二宮金次郎は、超がつく現実主義者でした。目の前の農村の荒廃、荒れた土地、飢饉による餓死者の続出。これらを前にして、もうダメだと悲観するのではなく、そのうち何とかなさ、誰かが助けてくれるさと楽観するのでもありませんでした。一所懸命、農業技術を本から学ぶことで、現実を自分の手で自分の力で必死に変えようとしてきました。これを戦前には「勤勉」と呼び、戦後に否定されてきたのなら、令和の今、もう一度その価値を問い直す必要があるのではないかと思います。私は、河東中の生徒のみなさんには、令和5年も勉強であれ、部活動・クラブチームであれ、高校受験や就職であれ、目の前の現実を見すえて、勤勉に取り組む1年にしてほしいと願って、この2つのお話をしました。今年の河東中生徒の成長と発展を祈って3学期始業式の式辞とします。